

対象とした実態把握に関する分析の成果であるという。本書で得られた成果を基礎として、日本の健康・福祉・医療に関する様々な研究が今後展開され、この分野に関する研究が一層深化することを期待したい。

(平井 誠)

若林芳樹・今井 修・瀬戸寿一・西村雄一郎編：
『参加型GISの理論と応用—みんなで作り・使う
地理空間情報—』古今書院, 2017年3月刊, 3,800
円(税別)

PGISという言葉を知ったことはあるだろうか？

PGISとは本書のタイトルにある参加型GIS (PGIS: Participatory GIS) を指す。本書によると、もともとは市民参加型GIS (PPGIS: Public participation GIS) だったが、より広い領域を指す用語としてPGISが定着してきている。用語の変容に見られるように、海外では理論の面でも応用の面でも活発な議論が展開されている。本書は、PGISが生まれた経緯、PGISを支える技術の発展によってPGISがどのように変わってきたのか、またその理論と応用について包括的にまとめたものである。本書の構成は、以下の通り三部構成、全27章からなる。

序章 参加型GIS (PGIS) の展開

第I部 PGISの理論

- 1 PGIS研究の系譜 (その1)
- 2 PGIS研究の系譜 (その2)
- 3 ジオデザインにおける市民参加の可能性
- 4 地元学とPPGIS
- 5 地理空間情報のクラウドソーシング
- 6 カウンターマッピング
- 7 地理空間情報の倫理

第II部 PGISを支える技術と仕組み

- 8 PGISとオープンガバメント・オープンデータ
- 9 PGISの活動とオープンソースGIS・オープンな地理空間情報
- 10 PGISのハードウェア
- 11 PPGIS教育ツール
- 12 PGISのための人材育成
- 13 先住民マッピング

第III部 PGISの応用

- 14 クライシスマッピング
- 15 ハザードマップと参加型GIS
- 16 放射線量マッピング
- 17 通学路見守り活動における地図活用
- 18 地域づくり：能登島の事例
- 19 市民参加型GISによる祭礼景観の復原
- 20 ICTプラットフォームによる市民協働型の課題解決
- 21 子育てマップと当事者参加
- 22 ボランティア組織による地図作製活動を通じた視覚障害者の外出支援
- 23 介護カルテ：西和賀町の事例
- 24 位置情報とARを用いたまち探検
- 25 大学教育と参加型GIS
- 26 海外におけるオープンガバメント・オープンデータの実践事例
- 27 日本におけるオープンガバメント・オープンデータの実践事例

序章にて本書のねらいは『PGISの理論、方法、実践にまたがる様々な話題を取り上げ、内外の事例にもとづいて現状と課題を検討すること』と宣言された通り、PGISに関する社会的な背景から最新の事例までを体系的に網羅した意欲的な一冊となっている。僭越ながら評者が推薦する読み進め方としては、序章でPGISの概要について押さ

えた後、第8章、第26章、第27章をセットで読み進めると、PGISの新たな局面とされる「オープンガバメント・オープンデータ」についてそれぞれ海外、日本国内、および日本国内の地方自治体レベルでの状況を把握できる。そうすることによって、他の章を読む際にそのテーマのPGISをめぐる状況における相対的な位置関係を意識して読むことができ整理がしやすい。またPGISの活用が進むと期待される中で必要となる人材育成に関連する情報については第11章、第12章、第25章に詳しい。第11章ではPGISのトレーニングキット（TK）について概説した後、TKの日本への適用可能性を検討している。第12章では過去の人材育成事業を振り返りながら、これからの人材育成プログラムを支えるには関係各所の協力や連携が必要だとしている。第25章では大学における参加型GISの状況について紹介している。

その他、話題は多岐にわたるが、各章は4～8ページ程にまとめられており、気になった章から読み進めることも可能である。

また「あとがき」も一読されたい。本書の前身ともいえる『GISと市民参加』（岡部・今井2007）の内容に始まり、編者らがこれまでどのようにPGISに関与してきたのかが概説されている。また紙面の制約により本文で十分検討できなかった事項に関する補足もなされている。

ただ一点だけ惜しいと感じたのは、PGISとPPGISの和訳についてである。序章では、市民参加型GIS（PPGIS: public participation GIS）、さらに広い領域を指す用語として参加型GIS（PGIS: Participatory GIS）という定義を紹介している。一方、第1章ではPPGIS（public participation GIS）

の和訳には、市民参加型GIS、参加型GISなど複数あり、訳語が定まっていないと注記されている。確かに、英語で議論が進んでいる学術専門用語を和訳するには、様々な角度からの検討を要し容易ではないことは理解している。しかし、PGISの理論と応用の両方を実践している専門家が集まって上梓された本書であるからこそ、本書の中でPPGISの和訳を定めていただいてもよかつたのではないかと思う¹⁾。とはいえ、本書がPGISをめぐる最新の国内外の状況を網羅的かつ体系的にまとめたことは揺るぎない事実であり、一読の価値がある。

なおPGISに関する新たな実践例や議論に関する情報は、著者らの研究グループのホームページ（<http://www.pgisj.com/>）で得ることが出来る。また本書で紹介された内容についてさらに理解を深めたい方は、前身とされる岡部・今井（2007）を参照されたい。本書との比較により、過去10年のPGISとPGISをめぐる社会の動向の変化を感じることができるのではないだろうか。

- 1) 前述の研究グループのホームページではPPGIS、PGISについて次のように紹介されている。『PPGIS（Public participation GIS, 市民参加型GIS）は、もともとアメリカ合衆国の都市での応用から始まったものですが、これを農村地域や発展途上国での応用にまで拡大したPGIS（Participatory GIS, 参加型GIS）という用語も使われるようになりました。』

参考文献

岡部篤行・今井 修監修（2007）『GISと市民参加』古今書院。

（秋山千亜紀）